【エッセイ部門・優秀賞】

人生の希望

鹿児島県立鶴丸高等学校 第２学年　脇田　七澄

その広場の腰掛けは固かった。どうして固い椅子なんて存在するのだろう。全ての椅子が柔らかければ人類はもう少し快適になれるかもしれないのに。僕はそう思いながらも座っていた。それしか選択肢がなかった。

小走りの少年がいた。目の焦点が合っていないように見えた。服装が乱れていた。そのまま自分の方に目をやると紫色のダボダボのシャツから肌着が少し出ていた。良い気持ちはしなかった。ただ模試がうまくいった僕にはあまり気にならなかった。この前の日に模試を受けていた。この模試で成功したいと思い始めたのは二ヶ月の模試で昨年の模試より悪い結果を手にして以来だった。思えば試験ばかりだった。試験が終われば次の試験を思う、そんな毎日のように感じた。その日々の先をどこへ向かわせたいのか無視してしまっていた。自分の人生の中での希望を持たず、ひたすら目の前のことをこなし続ける生き方が正しいのか分からなかった。虚しさも感じた。それは初めての感情ではなかった。遠くのカフェでパソコンに向き合う影が見えた。狭そうにしていた。

その日はとても暑かった。それでも広場には多くの人がいた。夏休みだからだろう。ガヤガヤした中に、一つ異質な音があった。大きな声で歌を歌う男性がいた。僕の知らない歌だった。堂々とした力強い歌声だった。自分の楽しめるものがある人にあこがれを抱いた。確かに僕も登下校、授業中、休み時間、そして家での時間、祖父母との時間、その一瞬一瞬を楽しむことはできていた。ただ、人生においてうちこめるような、熱中できるような何かは持っていない気がした。これもまた人生における希望につながるのだろう。今は勉強がそれに値するのかもしれない。それで良いのかわからなかった。また虚しさを感じた。同級生が歩いているのが見えた。たまにしゃべる程度の間柄だった。考えるより先に帽子を深くかぶってしまった。

ニュースを見たくなりスマホを取り出した。通信状況が悪くなかなかページが開かなかった。しぶしぶ諦めた。同年代の女子高生が二人で歩いていた。手にはタピオカドリンクを持っていた。声が聞こえた訳ではないが楽しい話をしているに違いなかった。楽しそうだった。ここでこれまで感じていた虚しさも考え過ぎなのかと思った。彼女らはただその時間を楽しんでいるだけなのだろう。もちろん難しい話は置いておいて、それでいいのだと思わないこともなかった。とりあえず今夏のうちに誰かと遊びに行こうと決めた。

遠い所にバルーンアートをする男性が見えた。イベントの一環らしいが子供が群がってはいなかった。しかしそれでも与えるという小さな優しさの積み重ねは人生を豊かにすると思う。今の僕は何かを与えられる人であるだろか。いや、これからなっていけばいい、今度はそう思えた。

人間とは不思議な生き物であるように思う。例えばご飯を食べるのは空腹だからであり、その本を買うのは面白そうだからであり、全ての行動が理由に基づいてとられている。ところがなぜ生きるのかという問いに即答するのは難しいはずだ。少なからず僕には重すぎる問いだ。小走りの少年も、歌う男性も、楽しそうな二人組も、風船をあげる男性も人生における希望を胸に宿しているのだろうか。はたまた、考えないようにしているのだろうか。もしかすると、希望を抱けないのは先の見えない時代で、世界を知らなすぎる僕にとって必然なのかもしれない。それならばいつか理想を抱ける日が来るまで日々を懸命に生きていくしかないのだろう。そしてそのいつかというのは成人する頃か、家族を持つ頃か、産業革命でも起きる頃か、あるいは分からないまま死んでいくことだってあるかもしれない。けれどそれが考えた末での分からないであれば、考えることからの逃げとは違って大きな意義を持つはずだと思う。よって時々の生き方に疑問を持つことがあっても、その時々の価値観で持って考え抜いていければ良いのだろう。そしてこれも十六歳の忙しい僕の考える生き方の正解の一つなのだと信じたい。

夕方になり、少し暑さは和らいでいたが、広場にはまだ多くの人がいた。僕は肌着を整え、腰掛から立ち上がり、人混みの中の一人となった。